

れしが光武は高祖より幾代へだ、りけると尋仰ける、各おぼえ申されざりければ汝は覺えたるかと仰事あり、光武は高祖九世の孫也と、後漢の本紀に見え侍ると申す、又返魂香の事は、何れの書にあるぞと、の給ひければ、皆人覺束なきよし也しに、返魂香の事、史漢の本文には見え候はず、白氏文集李夫人の樂府と、東坡詩注とには、武帝のたきて、夫人の魂を來すとしるし侍と申す、又屈原が蘭は何をか云と仰られしに、朱文公が注には、澤蘭なりと候と申す、太相國、左右をかへりみ給ひて、年わかきもの、よくおぼえたりなど、感じ仰られき、慶長乙巳^年十の年也けり、藤歛夫^{○藤原}の和歌浦菅神廂碑を書て見せられしに、宜攘斥拒絕之不暇、却從憑之と云句あり、却字^{懼高}いか、侍らむ、而字はまさるべきにや、古文におほき中に、ことに左傳にあまた所、此字法あるやうに覺ゆと云ければ、げにもさにごそとて、みづから筆をとりて、却の字を、而の字にあらたむ、さて菅相の諱を道眞と云事、別に又見るやと申されければ、近比近江甲賀金勝寺の官符は、菅相の親筆なるを見侍しに、菅原朝臣道眞と、位署にたゞしくありといへば、歛夫興に入られ侍りき、〔羅山先生行狀〕先生之博學、不可得言、既通五經四書之舊註、而覃思于程傳朱義也、朱子集傳也、蔡氏傳也、胡氏傳也、陳氏集說也、朱子章句集註也、新加訓點、且讀易、而有羅山手記、讀書而有渾天儀考、讀詩而有六義考、讀春秋而有劈頭論、遍讀三禮、而初墨點于周儀二經、乃欲特作倭曲禮、而不果也、有論語解、孟子要語解、大學解、中庸解也、精誦左氏、而公穀之點訓始爲之也、玩索孝經數家、惜孔氏傳之絕失于中華、而作諺解也、熟讀爾雅、而朱點之、乃欲別修倭雅、而不全就也、旁通漢唐諸儒之說、而潛心于濂溪、明道、伊川、橫渠、康節、考亭之手澤、且宋元明儒之裨道學、翼聖經者、莫不咨證也、象山、姚江、等陽儒、陰佛之學、亦能覷破之、管輯一書、以陽明攢眉名之、先漢之史存于世者、繙之、申習三史、而陳壽以下之諸史、亦轉覽之、滴露于朱文公之續春秋合部、往々講之、爲之手抄、而續編前編等皆研朱焉、涑水之通鑿、朱批者、前後凡兩本、而劉氏之外紀、金氏之前編、薛氏之宋元等、且古今之別乘、小史、史論、史評、